
FRAUD CALM -head- (番外・おまけ)

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FRAUD CALM -head- (番外・おまけ)

【ZPDF】

Z9669D

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

「LOST COIN第9章FRAUD CALM -head-」のおまけです カトランジエに到着したラックとアレイ。ミーナのお墓参りを済ませ、とりあえず店で休むことに。

(前書き)

勢いで書いてしまったけれど、これだけR15なので短編として投稿します。

意味もないし内容もオチも何もありません。

いろいろ続きを楽しみに読んでいるネット小説が、あちこちでみんならぶらぶになつていつちやつてているので、自分も単純に年齢制限あるやつ書いてみたくなつただけです。

もし、らぶらぶしてゐやつらなんか見たくなーよ、といつ人はばつくふりーず。

健全なやつをは

<http://nocode.syosetu.com/n9668d/>

に置き去りにしてあります。

怖いもの見たさで読んでみるわつていつ人は、びりびり

3年間暮らした街を旅立つてから徒步で10日間。戦場となつたグライアル平原を越え、ラッセル山道を越えて、ようやくカトランジエの街に到着した。

その道中、石畳で舗装された道がかなり破壊されていたのは仕方のないことだろう、何しろ2年前に終結した戦争では、セフィロト軍がこの街道を通つて王都に向かつたはずだから。

それでも、その沿線にあるカトランジエは思ったほどの被害が見られずほっとした。

「……なんだか、懐かしいな」

ラッセル山道の途中からカトランジエを見下ろし、思わずぽつりと呟いた。

しかし、隣で相変わらず不機嫌そうな顔をしたアレイさんは何の返答もしてくれなかつた。

それが不満で頬を膨らますと、彼は呆れたような溜息をついてくしゃりと髪をなでてくれた。紫の瞳には優しい光が灯つていた。

「とりあえず急ごう。日暮れが近付いている」

「うん」

今日中に、ねえちゃんに会いたいから。

一人そろつて再び歩を進めた。

秋も終りに近づいた夕刻の、ひやりとした風が頬にかかる髪を揺らした。

街はずれの森の中、静かにたたずむ教会は世間より葬り去られてから既に20年以上の時が過ぎているのだ。閑散とした前庭に人の

気配はない。

深い森の中で絶海の孤島のようにボツリと浮かぶそれは薦の巻く乳白色の壁と灰色の屋根、銀色の大きな十字架とを抱く小ぢんまりとした建物だつた。前面に取り付けられた色とりどりのステンドグラスは6枚羽根の天使をモチーフにしており、職人の技術と想いが存分に込められた逸品だ。

自分にとつてここは懐かしい場所だ。あの銀髪のヒトと会つた日も、初めてゲブラと会つた時も、天使崇拜の歴史を知つた時もその教会の裏手、少し開けた野原に一つ墓標が立つてゐる。

「ああ……」

思わず声が漏れた。

墓標に駆け寄つて跪く。

刻まれた名を、読み上げた。

「……ミーナ＝ファウスト」

本名を刻まなかつたのは、セフイロト軍に発見されたときのことと思つてだらう。

少し遅れて追いついたアレイさんも、すつと膝を折つた。

「ねえさん」

戸惑うような彼の声は、死を思い出した悲しみとも、再会できた喜びともつかぬ響きを纏つていた。

「やつと……会えたよ、アレイさん。ねえちゃんと、会えたよ……」

「そうだな」

彼がそう言つて肩を抱いてくれた時にはもう限界だつた。堰を切つたように涙が溢れ出し、おれは大きな声をあげて泣いた。まるで、生まれたままの赤子のようだ。

ねえちゃんとたくさんのことを見た。

戦争に負けたこと。死にかけたこと。記憶をなくして、でもアレイさんともう一度出会つて結婚したこと。ルシファのこと。ケテルのこと、再契約と止めた時の枷。そして

「あとね、子供、生まれたよ。男の子と女の子、一人ずつ。クラウドさんとダイアナさんが……代わりに、育ててくれるって」思わず声が震えた。

が、頑張つて押しとどめた。

「女の子の名前、ラスティミナにしあやつた。きっと強くて優しくて、美人さんになるよ。目の色がアレイさんと同じ……紫色で……」それ以上言葉が出なかつた。

アレイさんはずっと黙つて隣にいてくれた。
それだけでもう、十分だつた。

暗くなつてしまつてから街に戻つた。とりあえず宿を探して歩くと、懐かしいバーの入り口が目に入った。

どうやら鍵は掛かっていないようだ。

一人でそつと、その店に侵入した。

ねえちゃんの店の中はカビ臭いにおいがした。当たり前だ、もう3年も放つておいたのだから。

「奥に泊まれないかな？」

どうにか蠅燭を見つけ出して明かりにし、店の奥へと進む。うす明りで確認すると、店の奥にある密間の一つはなんとか使えそうだつた。ただ、ベッドは一つしかない。

隣のアレイさんと顔を見合せた。

結婚しているのだから、今更恥ずかしがる関係ではないのだが……これは自分が「ラック」でのヒトが「アレイさん」である以上、大問題だつた。

秋も深まり、夜は寒い。くつついて寝れば暖かいことは分かつているのだが、そんな近くに彼がいたら、自分の心臓は爆発してしまうかもしれない。

何しろ、記憶が戻つてからは、まだなのだ。

「大丈夫だ、俺は床で寝る」

「えつ？」

驚いていると、アレイさんはさつさと新しいシーツを準備して床に寝床を作ってしまう。

「疲れているだろう、早く寝ろ」

「え、あ、うん……」

戸惑いながらも装備を解いて眠る準備をする。ほとんど短衣一枚だけになり、ベッドに横たわった。

シーツに包まつたが、どうにも落ち着かない。

心臓の音がすぐそこにいる彼にまで聞こえやしないだろうか。

「ね、アレイさん。明日はゆっくり街のみんなに挨拶しに行こうね」

「……ああ」

彼の声が遠い。

ああ、なんだか寂しい。

一人シーツに包まつていると、どうしようもない寂寥感に襲わ
れた。

「ねえ」

「何だ？」

「やつぱつや……一緒に寝よつ？」

思い切ってそう言つと、返事がなかつた。

「……だめ？」

沈黙。

怒つてしまつたんだろうか？

そう思つたとき、彼の紫の瞳が一いち方に向けられた。

「それをお前が聞くのか？」

「……」

どこか厳しい声だった。

「俺は構わないが、お前は……」

「……いいよ。おれ、アレイさんと一緒にいい

とても寂しかった。

もしかすると、ねえちゃんの墓参りをしたことでもた自分は落ち込んでいたのかもしれない。彼に慰めを求めたのかもしれない。

「いいんだな」

確認を取つた彼の瞳は真剣だった。

まっすぐに見つめてくる紫水晶^{アメジスト}から目を逸らせなかつた。

少し躊躇つた彼も寝台にあがつた。

アレイさんは大きいから、自分は完全に腕の中に収まる形になる。大きな腕に抱かれて、やつぱり幸せだつた。ここは、ずっと前から世界で一番安心できる場所なんだ。

ふいに見上げると、端正に整つた顔が近くにある。

戦争の時にはつたりと切れてしまつた髪は短いままだつた。

「もう、髪伸ばさないの？」

「ああ」

残念だ。アレイさんの髪はさらさらですぐ手触りがいいから好きなんだけれど。

そう思つて短い髪に手を伸ばす。

そのためには少し腕から抜け出して顔を近づけなくちゃいけない。伏せられた長い睫毛が頬に影を落としていて、じきりとした。

アレイさんは本当にきれいだ……。

その美しく整えられた顔に釘付けになつていると、ふと目が開いて紫の瞳がこちらを覗きこんでいた。

「ア、アレイ、さん」

心拍数が跳ね上がる。

だめだ。心臓がおかしくなる。

紫水晶^{アメジスト}から目が離せない。このまま、吸い込まれてしまつゆっくりと目を閉じると、優しいキスが唇に降つてきた。その感触に、胸がきゅーっと締め付けられる。

髪を触っていた手をそのまま後頭部に当てて、今度は自分から近

づいた。

「ラック……」

深いバリトンが響く。

まるでアルコールに酔ったように頭の中がぼんやりとしてきた。
ああ、どうしよう。こんなにも、愛しい。

もう一度どちらともなく唇を求めるか、今度は口腔に舌が侵入してきた。温かく柔らかな舌の感触がさらに脳内の麻薬を増長する。

「ラック」としては初めてでも、体は覚えてる。この濃厚な口付けと、この先に待つ甘美な時間を。

纏っているのは薄い短衣一枚だけ。

大きな彼の手はゆっくりとそれを下から捲りあげていく。

心臓が早鐘のように鳴り響いている。

思わず彼の胸元にぎゅっとしがみついたまるで、初めての時のように。

「ラック」

それでも、甘いバリトンは自分を夢へと誘つていった。

素肌の背に、彼の手が触れる感触が心地いい。

何度も何度もキスをしながら、はだけた彼の胸に触れる。滑らかな感触がひどく心地いい。胸から肩、そして背に手を這わせるように撫でていった。

いつしか彼の手も自分の全身を隈なく撫でている。

「ああ……アレイさん……」

全身が疼く。体の芯から蕩けてしまいそうだ。

舌が首筋を這うと、ぞくり、と背筋を何かが駆け抜ける。さらりとその背筋を指でなぞられ、思わずびくんと震えてしまった。

顔が熱い。頭がぼんやりとする。

「声、出してもいいんだぞ?」

どこか意地の悪い彼の台詞に唇を尖らせると、さらに熱い舌が耳

朵に触れた。

「ひあっ」

熱い息がかかつて思わず声が漏れる。

それを契機に、快感の波が襲ってきた。

耳が弱い事を彼はよく知っている。反対側の耳にも指が侵入してきて、思わず嬌声を上げた。

「ひやああっ！ あっ……」

電撃が走るような感覚。

全身がぴくり、ぴくりと引き攣つた。

「相変わらず……弱いな」

「やつ……めて……っ」

「やめると思うのか？」

「こういう時の彼は本当にイジワルだ。あれ、いつもイジワルだっけ？」

なんてことを考える余裕はすぐになくなってしまつ。

彼の指が、背を伝い、大腿を伝つて下着の内側に侵入してくる。

「ん……」

ぬるりと濡れているのは自分でも分かる。

簡単に彼の指を受け入れてしまつた。

「あ……ふ……ああ」

熱い吐息が彼の口内に流れ込む。

「ん……んむっ……！」

唇を塞がれたまま。

快樂の波に押されて意識が一瞬真っ白になつた。

微かに痙攣の残る肢体と整わない息遣い。きっと頬も真っ赤に染まつているはずだ。

最初はひどく恥かしかつたのに、今は心の底から満たされていた。が、もちろんこれで終わるはずはない。

「まだ、これからだ」

紫の瞳がイジワルそうな光を帯びる。

「ふ……ふええ……」

こうなつてしまつてはもう逆らう術など残されていない。
彼の為すがまま、何度も果てた。

逞しい胸に抱かれ、大きな腕に包まれて。
心の中が満たされていくのを感じていた。

何故だろう、初めて本当に結ばれたような気持ちになつたのは。
まるで初めての時のように、下腹部に鈍痛が残つたのは。

「アレイさん……大好き」
そう呟いただけで、胸が押しつぶされそうなほど締め付けられる
のは。

答えの代わりに瞼に唇が押し当てられた。
くすぐつたくて思わず笑う。

田の前には、見慣れた彼の胸の傷があつた。
「これ……最後にケテルに貫かれたやつだね」
そつとその胸を撫でる。

そのまま指でなぞり、今度は肩口の引きつった傷跡を手のひらで
包み込む。

「これは、おれがつけた傷だ」

鋭いラースの牙で肩をかみ碎いた時の。

「それからこつちはおれをかばつた時の……」

縫合跡が痛々しい腹部の傷。そして、肩から腕にかけて伸びる傷
跡。

ほとんど全部自分のせいであつた傷跡だ。

「『めんね……』『めんね、アレイさん。いつもおれのせいであつて怪我してばかりだ』
一つ一つ刻まれた傷と、自分の業を思つて胸が裂かれそうに痛ん
だ。

じわり、と田の端に熱い滴が膨らむ。が、アレイさんはぎゅっと抱きしめてくれた。

「それは俺も同じだ」

深いバリトンは悲痛な響きを含んでいた。

彼の指が背をなぞる。大きく刻まれた十字の傷跡を撫でる。「セフィラにやられたのも……」

そして、左腕を撫で、さらに甲に口付けた。

「グラシヤ・ラボラスに左腕を喰われたのも……」

最後に、胸の上の傷にも唇を寄せた。

その感触で、思わず吐息が漏れた。

「ケテルに殺されかけたのも、すべて俺が……」

胸元の傷痕をきつく吸われて、自分の口からは妙に艶っぽい声が漏れた。

「俺が……」

傷に沿つようとして、次々と所有印を刻んでいく。

そのたびに、自分の体はびくりびくと跳ねた。

胸元に収まつた黒髪を抱え、唇から快樂の声を洩らしながら。

「もう傷つけさせない。誰にも渡さない」

「アレイさん……」

強い意志を帯びた彼の言葉に、全身が震えた。

「愛している、ラック。愛している……」

あの戦場の真ん中で雨に打たれながら聞いた言葉を繰り返し、繰り返し唱えていた。

そうしたら、あの時の満たされた感情が舞い戻ってきた　あの時、もう死んでもいいと思つてしまつたから、ケテルの狂行を許してしまつたんだろう。

だつて今　おれは、今すぐに死んでも構わないと思つてしまっている。

「おれも……愛してる。アレイさん……」

想いを伝えてから3年。やつと自分たちが、結ばれたのかもしれ

ない。

戦場で願つた恋は、ようやく成就して実を結んだ。

田覚めると、すぐ近くに長い睫毛が伏せられた端正な顔があった。

「アレイさん」の寝顔は何年ぶりだろう。

欲望に負けてその唇にキスをすると、彼はすぐに田覚めた。

「おはよっ、アレイさん」

「ん……ああ」

ゆつくりと紫水晶^{アメジスト}が光を反射する。

そこには自分の顔が映つていた。

ああ、なんて幸せなんだろう。

グレイスの時に享受した幸せを、ワックとしてもう一度体験してしまった。

「起きて、アレイさん」

そう言つたが、紫の瞳はまた閉じられた。

「んもつー」

もう一度起しそうか、と思つたとき、ぐいっと引き寄せられて唇を塞がれた。

思わず田を見開いたが、その温かで優しい感触に、すぐごほんやりとなる。

離れていくのが惜しいと思つたのは仕方ない。

「もう少し、このままで……」

珍しくおねだりをするアレイさんが、なんだか可愛いなんて思つてしまつた。

「うん、そうだね」

とはいえ、自分も幸せで幸せで。

だから、彼の腕の中でもう一度田を閉じた。

恐怖を思い出して泣いてしまった自分を優しく包み込んでくれた

日 初めて彼を意識した日を思い出しながら。

これから始まる冒険を思いながら、世界で一番安心できる場所で
もう一度眠りについた。

(後書き)

もつほんとに「めぐなさー！」勢いでやつて後悔しています。もつしません。

もしかしたら恥ずかしさにのつり消しているかも……（なら最初から載せるな）

いや、せっかく書いたし日の田を見せてやるつかと。
年齢制限初挑戦でした。もう、しません。

もし、この短編から入って興味を持った人は

「LOST COIN -head-」
<http://nocode.syosetu.com/n3660c/>
へどうぞ。

ただし、長いので気を付けてください。

それでは、じつまで読んでくださいありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9669d/>

FRAUD CALM -head- (番外・おまけ)

2010年10月8日14時44分発行